

童話 王女の猫の話

カレル・チャペック

七六

中野好夫

六

さて王女様は、スーザンが今頃はきつこ自分の生れた元のお家へ歸つてゐるだらうと、そういふ裁判所での話だつたものですから、早速御使をお婆さんの家へお出しになりました。使の者はそれこそ宙を飛ぶやうに、まるで馬の蹄から火花が出るほど馬を飛ばして参りました。するさ成程、さうでせう、お婆さんのお家の門口に孫息子のジヨニーが一匹眞黒な猫を抱いて、チヨコンと立つてゐるではありませんか。

『コレコレ、子供』、使の者は申しました。『王女様がそのスーザンとやらを御所望ぢや』。

ジヨニーはスーザンがそのまゝ連れてゆかれてしまふの

かと思ふに、胸も塞がるやうな思ひがしましたが、やつミ、『ぢやね、小父さん、僕が自分で王女様のところへ持つて行くから。いゝでせう』。ミ申しました。

そこでジヨニーはスーザンを大きな袋に入れて、大急ぎでお城へやつて参りました、そして王女様の前へ出て大聲で申しました。『サア、王女様、僕、猫を持つて來ましたよ、この猫が、王女様、あなたのスーザンだつて仰言るんですね、それぢやあなたが飼つてやつて下さい』。

そう言つてジヨニーは袋の口を開けてやりましたが、さうしたごときか、スーザンはあるの以前にお婆さんの籠から跳び出して來た時のやうに、元氣よく飛び出しては來ませんでした。可哀相に、スーザンは片方の足を跛をひいてゐる

ぢやありませんか。

『アラ、ほんごうに妾のスーズンだか、妾にでよく分らないわ。でも、いゝこゝがあつてよ。バフィーノを呼んでみるわ。』

バフィーノ君(犬の名はスーズンの姿を見るこ、まるで狂人のやうに大喜びで勢よく尻尾を振り立てました。でも残念なこゝに、バフィーノ君がスーズンに對つて何んて言つたのか、それからスーズンがバフィーノの君にぎんなお話をしたか、それは誰一人解るものは御座いませんでした。

『あゝ、ほんごにスーズンだわ。王女様は大喜びで仰言いました。』バフィーノが覺えてゐるんだもの。でも、ジヨニー、あんたほんごにいゝ子ね、スーズンを連れて來てくれて。御禮に何をして上げたらいゝかしら。あんたお金が欲しいの。』

ジヨニーは恥かしそうに眞赤になつて、コソコソミ申しました。『うゝん、僕お金なんぞいらぬや。お金ならね、お祖母さんがそりやドツサリ持つてるよ、さうしていゝか、

わからなくらい持つてるんだもの。』

『ぢや——つこ、ぢやあ、お菓子が欲しいの、あんた。』王女様は御訊きになりました。

『ううん』、ジヨニーは答へました。『菓子パンなんて、僕、いくらだつてもらへるよ。』

『ぢや、あのう——王女様は暫らく考へておいでになりましたが、』妾の持つてる玩具の中から何んでもいゝからあんたのいゝもの持つて行かない。』

『いゝや、いらぬや』。ジヨニーは急いで両手を振つて申しました。『ネ、王女様、僕はジャックナイフを持つてるんだよ、だから何んでも好きなものを自分でこさへられるんだもの。』

到頭王女様はもう言ひ出すものが無くなつておしまひになりました。そこで仕方なしに、『ぢやあね、ジヨニー、あんたの欲しいものを何んでも言つてくれな。』

『そうだなあ……僕……』ジヨニーはまるで罌粟の花のやうに眞赤になつて、物もはつきり言へませんでした。

『ネ、言つて御覽たら、ジヨニー』

『僕、やつぱり言へないや』。ジヨニーはもう耳の側まで眞赤になつて、オドオドしながら申しました。

するご今度は王女様の方が芍薬の花のやうに眞赤になつて、仰言いました。『まあ、あんた何故それが言へないの。』

『だつて……可哀相にジヨニーはうんうん唸るやうに申しました、王女様は、きつこ下さらぬに決つてるんだもの。』

王女様はまるで薔薇の花のやうに眞赤になつて、ひびくモチモチしないから仰言いました。『ぢや、もし妾が上げたらごう。』

それでもジヨニーは相變らず頭を左右に振りながら、『いや、下さるもんか。』

『ぢやほんきに上げたらごう。』

『そんなごもあるもんか』。ジヨニーは悲しさうに申しました。『僕、王子様ぢやないんだもの。』

『ぢやあネ、ジヨニー、いゝから、一寸あつち向いてゐない』。ミ、王女様はそう仰言つて、ジヨニーが向ふを向いた間に、そつこ忍び足で近づくミ、ジヨニーの一方の頬

つぺたに目にも止まらぬ早さで軽く一つキスをなさいました。ジヨニーがあはてゝ振り返つた時には王女様はもう素早く隅の方へ馳けて行つて、スーザンを兩手に抱き上げるミ、そのまゝやはらかい毛並みの中へ顔を埋めておしまひになりました。

ジヨニーはジヨニーで、すつかり嬉しさうに眞赤になつて申しました。『有難う、王女様、さようなら、僕、歸つて來ます。』

『ジヨニー王女様はソーツミ小聲で仰言いました。『あなたの欲しいつても、これだつたのね。』

『うん、そうなんだ』。ジヨニーは熱心に申しました。が丁度その時、王女様の侍女達がゾロゾロミお部屋へ入つて参りましたので、ジヨニーはなんミかして早く逃げ出してしまひたいミ、四邊を見廻はしました。

まるで天にでも登るやうな嬉しさで、ジヨニーは一目散にお家へ馳けて歸つて参りました。たゞ一度だけ、それは森の中で大きな樹の皮から可愛い小さなボートを伐りさる間、ジヨニーは休みましたが、出來上つたボートを衣籠の

中へ入れるさ、又しても一目散にお家へ歸つて参りました。

家へ歸つてゐるさ、オヤ、あそこに、ホラ、戸口にスー

今スーザンをお城に連れて行つたばかりだのになあ。

「あゝ、あゝ、ジヨニーや」。お祖母さんは靜かに申しま

した。『それが猫の性質うまれつきなんだよ、たごへきんなに遠くで

あつても、チャンミ生れた場所へ歸つて来るのが。明日になつたら、お前も一度お城へ連れて行つてやるがいよよ。』

翌る朝になるさ、ジヨニーは又してもスーザンを抱いてお城へ馳けて参りました。『王女様、ジヨニーは苦しさうに息を切らしながら申しました。『僕、またスーザンを連れて來ました。』

ほんまにいけない奴だ、王女様の所から脱け出して、チャンミ僕の家へ歸つてきましたよ。』

『ほんまにお前はいたづら者ね。王女様はスーザンの頭を撫でながら仰言ひました。』

『まるで風みたいに逃げて行つちまふなん

ザンがチヨコンミ坐つて一方の悪い方の足で一心不亂に毛

並みのお洗濯をしてゐるではありませんか。

『お祖母さん、ジヨニーは思はず叫び出しました。『僕、

するさその時ジヨニーが突然申しました。『王女様はこのボート欲しかありませんか。』

『エ、妾に頂戴』、王女様は仰言ひました。『それから今日はスーザンの代りに何を上げようかしら』。

『僕、知らないや』。はや頭の前まで真赤になつてジヨニーが申しました。

『ね、言つて頂戴！』王女様はなほ一層真赤になつてソーで小聲で仰言いました。

『いやだあ』。

『ねえ、言つて頂戴つたら……』

『いやだなあ』。

王女様は段々首垂れてしまつて、指先でモジモジその小さいポートを玩具にしていらつしやいましたが、『ちや、昨日と同じものが欲しいのね、あんた』、

『うん、そうだなあ……』ジヨニーは思はずそう答へてしまひました。そしてそれを貰ふに、またインソイソミ歸つて参りました。たゞ今日も、歸り途で森の柳の樹のところで一寸休んで、今度は可愛らしい笛をこしらへました。

さて家へ歸つてみるに、スーザンは果してチャンミ戸口に坐つて頻りに前足で口鬚のお化粧をして居ります。『お

祖母さん』、ジヨニーは大聲で申しました。『またスーザンが歸つてるよ』。

『そうかね、ちやあ捕へておいて、明日はまたお城へ連れて行つてやるがいよ。そのうちにはお城に馴れるやうになるだらうからね』。

そこで翌る朝になるに、ジヨニーは又してもスーザンを袋に入れてお城へやつて参りました。『王女様、王女様』、彼は例のやうにはじめました。『またスーザンが歸つて来ました』。

でも今日は何故だか王女様は不機嫌さうにブンミ口を尖らして、物一つ仰言いませんでした。

『ね、王女様』、ジヨニーは思ひ切つて申しました。『僕、昨日こんな笛をこさへたんですが……』

『見せて御覽』、王女様は相變らずブンミ口を尖ながらかしたまゝ仰言いました。ジヨニーはジーツミ王女様の顔をうかゞつて居りましたが、さうして今日は王女様が機嫌を悪くしてゐらつしやるのか、不思議で不思議でなりません。でした。

がその時王女様は笛をきつて一吹きお吹きになります
ミ、それはそれはよい音をして鳴りました。そこで王女様
は、『まあ、あなたは随分いけないのね。チャンミ知つて
るわ、お駄賃にまた昨日ミ同んなじやうにしてもらはふミ
思つて、わざつミスーザンミ一緒になつて悪戯してゐるの
よ。』

ジョニーはすつかり悲しくなつてしまひました。そして
帽子をきつて、淋しさうに申しました。『あゝ、王女様が
さう仰言るのなら、僕仕方がないや。だけ僕、もう二度
ミ王女様のところへは来ませんからね。』

そう言つてジョニーは、それはそれは悲しい思ひで、ト
ポトボミ家へ歸つて参りました。歸つて見るミ、——ホ
ラ、またしてもスーザンが戸口に坐つて居ります、そして
今日は牛乳をお腹一杯にいたゞいて、さも氣持よささうに
身體中をペロペロなめて居ります。ジョニーはツミミ行つ
て、スーザンミ竝んで腰を下すミ、膝の上に抱き上げたま
ま、じつミいつまでも黙つて坐つて居りました。

だがやがて、馬に乗つた王様のお使ひが飛ぶやうに馳け

つけて参りました。『コレコレ、子供、王様の御命令だ、
すぐさまスーザンをお城へ連れて参れ』。

『駄目ですよ、小父さん』。ジョニーは申しました。『猫
つてものはね、自分の生れたお家へきつミ歸つて来るもん
なんですよ。』

『だが、コレ、子供。王女様の仰言るには、その方は毎
日スーザンをお城へ連れ参つてよいミの御言葉ぢや。』

『だけミもね、小父さん、僕は王女様にもう二度ミ來な
いつて、そう言つちまつたんだもの』。ジョニーは首を振
りながら申しました。

丁度その時でした、戸口からお祖母さんが出て参りまし
た。そして『これはこれは、お使ひのお方、犬ミいふもの
はな、主人につくもので御座いますが、猫は家を離れない
もので御座いますよ。だからスーザンも決してこの家を忘
れるこゝは御座いせんから、ハイハイ。』

それを聞くミ、使ひの者はヒラリミ馬に跳び乗つて、ま
た一散にお城へ歸つて行きました。するミ、サア翌る日に
なるミ、百頭立のそれはそれは立派な大きな馬車が一臺、

ピタリッとお祖母さんのお家の前に止まりました。そして御者がツカヅカミ馬車から降りるに、四邊近所に響きわたるやうな大聲で申しました。「コレコレ、老婆、王様の御命令ぢや、猫がごうしてもその家を忘れないものであるからには、家もろごも、いやついでに其方竝に孫息子ジヨニもろごも、スーザンをば城へ連れて参れよの御命令ぢや。其方共の家は造作もなく御城のお庭に持ち運び出来やうからよの王様の思召であるぞ」。

そう言つたかと思ふに、忽ち澤山の人々がドヤドヤやつて来て、お祖母さんのお家をそのまゝそつくり馬車の中に積んでしまひました。御者はやがて鞭をピシリツミ一つ鳴らして、ソラ曳け!!』といふ一聲と一緒に、百頭の馬が一度に曳き出します、そして馬車はドンドンお城の方へ近づいて参ります。馬車の上では、お家の戸口にお祖母さんジヨニミ、それからスーザンが坐つて居りましたが、その時ふにお祖母さんは、あの何時ぞやお城で、太后様がスーザンが未來の王様をお城へお連れしてくる、しかもその王様はお家ジミそつくりお出でになるんだといふ夢を御覽にな

つたごを思ひ出しました。ほんごにそれは突然ふにお祖母さんの心の中にヒヨイミ浮んだのですが、お祖母さんはそのまゝそのごは一言も申しませんでした。

さて、いよいよお城へ到着致しますに、みんなの歓迎ぶりといつたら、それは大變なものでありました。お家は早速御殿のお庭の中に建てられるし、なにしろスーザンはお家忘れられないのですから、もう今では逃げ出すごもありませんでした。そして以前のお家の時と同じやうに、お祖母さんジヨニミ三人仲よく暮すごになりました。王女様はスーザンとお遊びになりたくりますご、いつでもお祖母さんのお家までスーザンに逢ひにいらつしやいます。それに王女様はなにしろスーザンが大好きでいらつしやいますから、もう三日に一度はきつご御見えになりました。そしてジヨニミも大の大的仲好しにおなりになりましたごさ。

さて、それから、みんなごうなりましたかしら、でもそれはもう私のこのお話ではありません。たゞ若しジヨニミが大きくなつて、ほんごうにその國の王様になつたごした

ら、よろしいか、皆さん、それはスーザンが居たからでもなければ、またあの王女様ミ大の仲好しであつたからでもありません、それはジョニーが大きくなつて、國中のみなのためにそれはそれは男らしい、立派な行ひを澤山にしたからでありました。(をほり)

カレル・チャベックに就いて

カレル・チャベックは現存するチェコスロヴァキヤの作家である。彼は決して謂ふところの童話作家ではない、童話はいはゞ彼の餘技であるかもしれない。彼の名はチェコ一流の作家として今日世界的の名聲を獲てゐるものであるが、戯曲家としての彼の存在はわが國でもすでに十年前から紹介されてゐる。戯曲家、小説家、隨筆家、演出者、スケッチ畫家、彼はおそろしく器用な男であるらしいが、童話への進出は比較的新しいので、先般來譯出した一篇も一九三二年出版された最近の童話集の巻頭的一篇である。なほ外にも彼には小犬の生ひ立ちを書いた長篇少年讀物『ダシエンカ』といふのがあるが、これはたしか邦譯もどこか

らか出て居るはずである。

元來チャベックの作品は小説にしる戯曲にしる、いつも極めて豊かな空想的要素を、物の見方がどんな場合でも多少の餘裕を残した人間的なユーモアによつて特長つけられ、またその點で現代の文學に特異な位置を占めてゐるのであるが、それらの特質はそのまゝ彼の童話の世界に持ち込まれて居るこいつてよからう。譯者は決して童話研究家でもなんでもないので、餘り口幅たいこは無論言へないが、チャベックの童話が従來のお伽話の紋切型、フェアリーミ小人ミ古風な魔法の世界を捨て、吾々の現代の生活の中にお伽話の豊かな空想の世界を見出してゐることは注目しに値すると思ふ。譯出しなかつたが、彼は浮浪人の中にも、郵便配達夫の中にも、お巡査さんの生活の中にもお伽話を見出すここの出来る人間なのである。彼の心憎い點は一見全く寂莫たる現代生活の極めて殺風景な瑣末事の中に思はず吾々を微笑させるやうな明朗な空想の世界を導き入られてくれるこゝである。彼の最も嫌ひなものは、穿き違へた人情ミ涙のセンチメンタリズムである。その意味で彼の

童話は一部の非難を甘受しなければならぬかもしれない。だがこれは子供を持つ親として、譯者の私見は、當世流行するところの、あの俗悪極まる功利的、勸善懲惡主義、おしつけがましい不自然な人情美談だけは子供の明らかな頭に印象させてほしくないものである。西歐社會は風俗習慣の相異から、彼の童話のごときもそのまま日本の子供に傳へることは如何かご考へられる節も無論あらうと思ふが、一度指導者の頭を通して適當な取扱ひを受ける時には、そこに何物か吾々に新しい暗示を與へてくれるやうに思へる彼のお伽話の世界ではあるまいか、これが素人の愚見である。

二月の窓から

雪どけと霜どけでお山の上の大銀杏樹も窓から遙かに仰ぐこのころ。

寒い朝、霜柱が二寸もある霜柱がまつ白にお庭一面です。さつくさつくとふんで三四寸にのびた水仙の芽を見に行きます、まゝことのおうちへのおみやげはきらきら光るぼつこりとれた氷菓子です。

* * *

一年中で一番心落付く月だと誰かが言つた二月をやつぱり心せく過してぬます恥しいことですけれど。

代りばんに風邪を引いたりひかれたりしてぬまじたがもう大丈夫です。

お雛様のお仕度、九年度のラストヘビー、おいそがしいでせう皆様、どうぞお大事に。